

八月のテーマ

万人幸福の葉



え・城谷俊也

すぐに活用できる 実践の手引き

【万】 人幸福の葉』は純粋倫理のエッセンスを集約した基本テキストです。著者・丸山敏雄（倫理運動の創始者）は、同書を知識の書ではなく、実践の書として著しました。平易な表現をもって著者が説かれ、実践すべき内容がより理解できるよう、随所に、様々な「たとえ」が盛り込まれています。

*

Aさんは小学生の頃、家庭倫理の会が主催する「子供倫理塾」（当時の名称は「少年日曜朝の集い」）に毎週通い、『葉』に触れてきました。ある日の子供倫理塾では、皆で第十一條を輪読しました。

二宮尊徳先生が、弟子に示したたらいの水の例話のように、欲心を起こして水を自分の方にかきよせると、向こうににげる。人のためにと向こうにおしやれば、わが方にかえる。金銭も、物質も、人の幸福も亦同じことである（八十三頁）

この一節に触れ、（自分もやってみよう）と思ったA君。帰宅後、浴槽の残り湯で、たらいの水の例話を実行してみたのです。

お湯をこちら側にかき寄せると、手前の壁にぶつかり、お湯は向こう側へ逃げていきます。今度は向こう側へ押しやると、反対の壁にぶつかり、お湯はこちら側に戻ってきました。

*

三十数年が経過した今も、Aさんの脳裏には、あの浴室での情景が甦ってきます。そして、つい欲に流されそうになると、自分を律する助けになっていると言います。

清掃会社に勤務するBさんは、結婚して数年が経った頃、帰宅するたびにストレスを溜め込んでいました。日々子育てに追われる妻は、掃除にまで手が回らず、いつも家の中が汚れていました。Bさんは、清掃を生業としている自分の家が汚れていることがどうしても許せなかったのです。

ある日、そのことを先輩に打ち明けると、『葉』の第十七條の一節を紹介されました。

その大演劇の主役は、己自身である。家にあつては父、会社に出では社員。そして旅行もあり、選挙もある。その時、その場を、いかに、真理（神）の筋書に合するように演出しているか。（百十六〜百十七頁）

そして、「君は家に帰れば夫であり父親なんだよ。清掃業者ではないんだよ。その時その場に合った立場に変わらなければいけないよ」と諭されました。

以来Bさんは、家の中で汚れているところを見つけると、妻の大変さを思いやって、自分から掃除をするようになったのです。家庭内では、清掃業者ではなく、夫として、父親として、一人の家庭人として実践に励んでいます。

*

丸山敏雄は、『葉』の活用法について、「全て無条件に、理屈なしにやってみる」と述べています。様々な情報が飛び交う現代社会において、正しい情報をつかむには、まず自分自身がやってみて、その正しさを実感することが必須です。『葉』に示された平易な「たとえ」を一つのヒントに、同書を倫理経営の手引きとして大いに活用していきましょう。